

---

# 今日の村山

名前も知らない木なんです

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

今日の村山

### 【Nコード】

N5357Y

### 【作者名】

名前も知らない木なんです

### 【あらすじ】

彼の名は村山と言った。村山じゃなくて篤志あつしと言った。村山は名字だった。そんな村山篤志は今日も意気揚々と学校に出る。彼もまた、普通の人間として生涯を送るつもりなのだ。

まあなんといいか始まりません。

## 第一章 プロローグ（前書き）

ここから始まる村山篤志伝。

## 第一章 プロローグ

10時方向を指した短針が視界に入ってくる、おかしいな。そういえば今日は入学式だったっけ？ じゃあなおさらおかしいじゃないか。ははっ、10時ね。こいつはおかしいや。

あ、駄目だった。

「さあて、村山君。事情を話してもらおうか？ いや、別にその事情が情状酌量の余地があれば私としては全くかまわないよ」

寝坊し、11時頃に颯爽と登校した俺は生徒指導室に詰め込まれ、いま俺はこうして体育教官小沢清治郎せいじろうにいびられているのです。

「なんというか…こう、バーンってね。なっただんですよ分かります？」

俺は言い訳に支離滅裂なことを言っていた。

「篤志君がバーンってなっただん？ で？」  
知らねえよ。

「ええつとですね。つまりは、様々な理由が絡み合ってしまったんです」

「どんな理由かね？」

小沢のとなり立っている黒人体育教師ジャン・リカルドがいやな笑みで聞いてくる。何も考えられないのでとりあえず言う。

「来る途中で車に轢かれてしまったり？」

「うーむ、俺支離滅裂。」

「よく無事でいたね」

そんな人間居たら怖いつて。

「で？ ホントの所は？」

しつこいなこの男。職務だから許してやるとするか。

「いや、まあ、その、意識が飛んでたんです。10時まで」

小沢はふうっ、とため息をつきながら背もたれに大きく寄りかかる。そしてジャンに耳打ちをする。何やってんのか知らんが、物騒

なことを話しているようだ。耳打ちに対してジャンは頷いた。

「この蘭高校は由緒ある名門校なのは分かっているだろう？」

「ええまあはい」

「そんな高校で寝坊なんていう事でこんな時間に登校しているような生徒が見られるとこちらも厄介だね」

「寝坊じゃないです」

「一応食い下がったか？」

「じゃあ意識が飛んでいた理由は？」

「昨日の夜の話でした。あれは23時頃でしたでしょうか。私は布団に入っていました。そして目を閉じる。ここまでは良いでしょう。しかし、気がつけば周りは朝に、時間は翌日10時に。こんな事が信じられますか？」

「寝坊していたということかね」

「かなり遠い意味で言えばそうですね。私は国語的な表現からして

……」

「寝坊で良いんだね？」

「…はい」

俺はうなずくしかなかった。体育教師のにらみって怖い。

「…で、寝坊なんていう事でこんな時間に登校しているような生徒が見られるとこちらも厄介だね」

「大事なことなので二度言われたがたしかに一理あるな。俺が校長なら休んでもらっていた方が良かったと考える。もう一つ、いつの間にかそう指示されたのか、ジャンはいつの間にか俺の後ろにいやがる。私をどうするつもりなんです？」

怖いから聞いてみた。

「何、別に体罰というのは原則禁止だからね。ここで4000字詰め原稿用紙5枚分の反省文を書いてもらうだけだよ。じゃ」

小沢はジャンを残して部屋から出て行った。

「ああもう！ こんなの！」

俺は自らの失敗に腹を立てながらペンを走らせ始めるのであった。

背後に立つ黒人マツチヨに反抗するほど腕に自信は無い。

結局俺は反省文を頑張つて書き、部屋を出たときにはすでに二時を回っていた。さらに昼飯を食っていないため、異常に腹が減っていた。

「いやな因縁ができちゃったなあ」

体育教師に覚えられるといろいろめんどくさいからなあ。仕方ないのでもう新入生が居なくなつた校舎を見て回り、帰路につくことにした。

## 第二話 初めての蘭高校（前書き）

昨日は寝坊のせいで体育教師に捕まっ  
ていやな思いをした村山。  
しかし彼はめげずに今日も登校する。

## 第二話 初めての蘭高校

翌日

俺の家族構成は父、村山 一成<sup>かずなり</sup>。母、村山 柳子<sup>りゅうじ</sup>。兄、村山 遼<sup>りょう</sup>史<sup>うし</sup>。俺。妹、村山 三奈<sup>みな</sup>。という感じで構成されている。難の変哲もなく、親が海外行ったりしてなく、女系と言ったわけでもない。腹正しいのは妹が異常に俺のことを嫌っていると言うことだ。ついでに兄のことも嫌っているが、兄も俺も温厚なので全てを優しく受け止めてあげている。さらに妹は何故か父のことも妹は嫌っているのだ。思春期の妹としては相応の反応だ。妹は我が家の男を全て見下しているとさえ感じる。しかし、逆に父は妹のことを溺愛しているので、妹の男関係とかの話になるとめっちゃめっちゃになる。妹に暴言を吐かれた時なんてそれはもう…。

そして朝ご飯。

「なんで昨日は起こしてくれなかったんだ？」

「あら、昨日なにかあったのかしら？」

俺と妹と父が座っている食卓。兄は寮生活なのでもう朝ご飯には顔を出さない。休日ぐらいいは来てくれると思うが。母は台所において、母に俺は昨日の事に対する問いを投げかける。

「あなた今日が入学式っていつてなかったかしら？」

莫迦な。俺がそんなことでミスをするとも言うのか。試しにカレンダーを見る。

「ありゃ？」

一日だけ日にちをはき違えていたらしい。俺のバカヤロウ。

「バカアニキだから仕方の無い事よ。まったくこれだからうちの男は」

妹が実にやかましい暴言を吐く。しかしそれに反応したのは俺ではなかった。

「おいちよつと。それ私も含まれてないか？」



どうしてなぜか親父がうるたえる。お父さんはそこで会話に入るんだね。

「あら？ お父さん自覚無かった？」

妹自身も親父のことも含めての言動だったらしく、妹は親父に対し冷ややかに言い放ってしまった。親父は箸を持ったまま止まる。しかも豆腐を掴んだまま。あれ絹の方だろ。

「…」

箸が落ちる音が響き、親父の魂は彼方に消えてしまった。絹豆腐も味噌汁のなかに墜ちていった。全く…。

「こら三奈。お父さんはお前の事を溺愛しているんだからそんなことを言えばどうなるか。15歳になるんだから分らないはずもないでしょうに」

俺は忠告してやる。ホントこの妹は辛口過ぎるんだよな。成績良くてルックスが良いのが気に入らないが。

「うるさいわよバカアニキ」

「三奈、何でもかんでもかみつかないの！ お父さんだって頑張ってるのよ？」

三奈のことを母がしかる。心の底からざまあみる。晴れやかな気分で吸う味噌汁はまた格別だ。ヒヤッヒヤッヒヤ。

「はい」

返事を延ばすなよ全く。

「ごちそうさま」

気を失ってよだれを垂らしかかっている親父を傍目に俺は食器を手早くシンクに持って行く。妹は行儀良く食っている。

「今日はできるだけ早めに行くよ。母さん。昨日目を付けられたこともあるし」

「分かったわ」

「バカだからしょうがないわよ」

やっぱ妹はかみついてくる生き物だった。

「三奈。お前学校では絶対猫かぶってるよな」

この性格なのに集まる女子は妙におしとやか。この前家に招き入れてきた女子もお嬢様的な雰囲気を出していた。こりゃあ黒だな。前から知っていたが。

「あんたは私の中学校と関係ないでしょ！」

「三年生なんだからもう少し慎みを…」  
持つて欲しいね。

「あんたは私の親じゃない！」

「そりゃ台所に立っているおばさんとそこで気を失ってる親父が親だ。当たり前だろ」

「ぐぬぬ…」

妹が歯がゆいに行った表情で睨んでくる。そんなに睨んでも何も出てこないからな。

俺はさっさと妹を無視しつつ自室に戻り、着替えて家を出る。

「行つてきます！」

「行つてらっしゃい」

母の爽やかな送り出しの言葉と、

「帰ってくるなバカアニキ！」

妹の不愉快な追い出しの言葉。てめえの音波には俺の鼓膜は反動できないぜ。とはいいつつもコミュニケーションをしてるだけ俺&兄と妹の関係は悪くないのかも知れない。不愉快だけど。

颯爽と玄関を開け、真っ先に駅へと向かう。蘭高校は何かと交通の便がよいのでありがたいこと限りなし。これが山の上だったらホント参ったことです。

さて、これから学校生活が始まるわけだが俺はまだクラスの奴と顔を合わせていないと言うね。とりあえず友達作って3年間を乗り切るといふささやかな願いを叶えよう。

第三話 デモンストレーション(前書き)

デモンストレーション

### 第三話 デモンストレーション

案外、クラスの目は厳しくない。昨日は慌ただしく、友達云々言っている暇もなかったらしい。俺にもついている余地ができたのは僥倖だ。

「と言うことで皆さん。昨日は慌ただしくてできなかった自己紹介です」

俺の状況説明をわざと遮るかの如くそう切り出したのはこのクラスを担当する女性教師。南山悦子みなみやまえつこという、男らしすぎる粋な美人。その顔のせい、若さの割に妙に貫禄が出ている。資質、と言う奴やつなのだろうか。とまあ、先生に対する批評はここまでとする。

自己紹介と言えば先陣を切って1番目が指名されるに違いない。一応これでも何度も自分の自己紹介を反芻してきたのだ、最後のチエックと行くか。えーっと私は16歳の独身…。しかし俺の予想は余りにスウィートだったということがここで分かってしまった。

「では、昨日来なかった村山君」

クラスがざわめく。知らないんだけど、俺から？ ……なんでだよ！

口答えするぞ！ そう、いきなり俺が呼ばれてしまったのである。

「え、先生。私最後でも最初でもありません！」

この女、俺に何か恨みでもあるのだろうか。

「文句あんのか？」

江戸っ子がよこの女。いや…江戸っ子か？

「あります！」

とにかく生徒の主張は受け入れるべきだと思っんですよ。

「黙れ！」

ビクッ！ 俺の体は硬直する。生徒の主張は受け入れてもらえなかったよ…。しかもこの女は思ったより体育会系だった。目は大分つり上がってるし、反論したらどうなるか分かったもんじゃない。いや、分かっているのだがきつと認めたくないだろう。頭が。

「お前は担任の私の言うことを聞けないのか!? ああん?」

いつの間にか鼻先18?の所まで顔が来ているという状況、超スピードとは恐ろしいの。ほんとマジ勘弁してください。あんた昨日ラーメン食ったでしょ、息で分かりますよ。絶対言わないけど。

「いや、その…まあですね。世間の常識では…」

「ここでは私がルールだが?」

何だよこいつ! 独裁政治かこいつ! 誰か助け船を…だめだ、みんな初対面だった。グヌウエ!

「いや、その…あれですか?」

「何が…あれなんだ?」

もつと近づけてくる先生。あんた女じゃないのかよ。他の男子の中にうらやましそうな目で見ている野郎どもが多少居る。代わってやるよ。できたらな。

「えつと…先生は私に何か恨みでもあるのでしょうか」

「無い」

余計分からね。新手のいじめか?

「じゃあなんでわざわざ私から始めよう?」

まさかもう先生の間ではある程度の話題になっているとか、まさかあの程度でな。

「お前の名前を職員室でちよくちよく耳に挟んでな、その時名簿でお前の名前を調べたんだよ。あ、こいつ来てない奴だと思っただな。

そしたらこのこ悪びれもなく今朝現れたってわけだ。これ以上理由が要るか?」

要りません、もうどうすんのよこれ。早速俺の名前が知れ渡っちゃまったじゃねえか。たかが寝坊でなんでこんな目に…。そんな思いを振り払うように俺は唇をかみしめ、拳を握りしめた。切り忘れていた爪が肌に刺さって痛くって反射的にパーになった。

「お? どうした? 目尻に涙が出てるぞ」

こいつは先生じゃない。鬼だ。もういいこれ以上粘ったって無駄に目立ってしまうだけだ。あ、手遅れだったわ。

「分かりましたよ！ やりやあいいでしょやりやあ！」

俺はそう言つてスタンダップ。Y A K E K U S O !

「よし、その意気だ。おゝいみんな。今から村山篤志が自己紹介するつてよ！」

俺は切つてやったさ。南山ババアにこの上ないメンチを。でもな？

世の中には見ちゃいけない顔つて言うのがあつてな？ とくにこの女の切れちまったときの顔なんだがその顔を見ちゃうと耐性のない奴は失禁しちまうほど恐ろしいらしい。

「…なにか文句でも？」

こわいよ！

「いえいえいえいえいえないですないですないですつて！」

「よろしい」

そう言つて先生は般若を止めて教卓前に戻つていった。

「クスツ」

クラスのどこかで笑い声起きる。おいおい、笑い事じゃないぜ。本当だつてば。

「えー皆さん。静粛に」

俺はクラスが一定の静かになるまで手で制す。うむ、まあまあのコンディションじゃないの？ 俺は口を開いた。

「ええー、北西中学から来ました村山篤志です。…それと16歳で、カレーです。好きな食べ物が。それと頑張ってください」

これで終わりですよいですよね先生。チラツと見てみる。何か睨んでいるような気がしないでもないが、知らん！ 座る！

「チツ。えー…じゃあ一番から自己紹介頼む」

一番の生徒「ヒヤイ!？」

教師のくせに舌打ち!？ しかも結構ふにゃふにゃしてた1番目の男子が呼ばれた途端に直線になるとか…どれほどのプレッシャーを孕んでいるんだあの女…。

そんな感じで自己紹介は俺の左後ろの奴までいった。

「じゃあ次、宝条椿姫（ほなぢまき）」

先生に呼ばれた瞬間男子の目は一気にそこに注がれる。いったい何  
が起きようとしているんだ？ 宝条が椅子を引き、立つ音が聞こえ  
る。いままで全く無関心に聞いてきた俺だったが他の男子の反応が  
あまりにも顕著すぎたので、とりあえず後ろを向くことにした。

「宝条椿姫。天翔中学から来ました」

そこには美女？ 女神？ ビーナス？ のような、もう美という形  
容単語が付かないと失礼な気がしてくる女性が居た。これは確かに  
男子の反応も頷ける。しかしこれほどだと遠慮して告白すらされな  
いって言うパターンであることが予想できる。

「宝条家の正当な跡継ぎとして、頑張りたいと思います」

ああ、やっぱり両家の出か。そう考えると、たしかに余り垢抜けて  
いない気もする。ような気がした。

そのまま宝条は席に着き、頬突きながら窓の外を眺め始めた。う  
む、絵になる構図だな。見とれちゃうな。

「いつまで宝条を眺めている。村山」

ああ、入学直後でもうミスった俺の高校生活。そう考えながらも  
脊髄反射により一瞬で前を向く俺。いやまで、ここで焦ればより俺  
の立場が危うくなるんじゃないか？ ここは自然体で行こう。さら  
に後ろから宝条の視線を感じる、痛い。つい首元を押さえる。そし  
たら視線の痛みは頭頂部に移動してしまった。

「じゃあ自己紹介は終わりだ。では…」

そのあと先生はある程度の話をして、教材を配ってHRを終わりに  
にした。聞けばこのあとは何もやらないらしく、好きに部活を見て  
いけだそうだ。さて、周囲の誰かを誘うことにしよう。

第四話 武藤武史少年（前書き）

村山はとりあえず前の人間に絡むことにした。  
前の人間は武藤と叫んだ。



## 第四話 武藤武史少年

この蘭高校は平均学力がある程度高めな学校で、それ故両家の人間だとかと一般庶民が混同して存在するような高校だ。要するに、様々な人間が居ると言うことだな。

「さて…」

俺は周囲を見渡す。一部を除いて、ほとんどの生徒が一人で帰りの支度をしている途中だ。よし、ここは無難に前の男を捕まえよう。

「ヘイ」

俺は前の男の肩を叩きながら声をかける。すると、前の男は振り返ってきた。

「なんだね？」

この男、妙に偉そうな口ぶりである。特徴としては、少し老けた顔なのに妙に良い体格をしている感じだな。

「いや、このあと暇か？」

当然だが暇でなければ他を当たるつもりだ。

「拙者は剣道部に真っ先に寄るが…そのあとは暇だね」

剣道志望か…たしかに腕の筋肉が豊富な事が見て取れるほどにある。

「よし決めた。お前にくつついていく。名前なんだっけ？」

「さっき自己紹介で言った…武藤武史むとう たけしでござる」

「よし覚えた。じゃあ行ってみようか！」

「…一人の方が良かったのだが。まあよいか」

武藤はめんどくさそうだったが俺はめんどくさくないので問題ない。剣道場というのは知っている人も居ると思うが、臭い。これはまあ仕方の無いことで、真夏にあんな装備であんなに動き回り、なおかつ洗わなければあんな臭いになるのは仕方の無いことだとは思っただが受け入れぬ。

「あそこにいる御仁を見てみよ」

武藤がある方向を指さす。それをたどっていくと、周りの部員が地

稽古してる中で、一人だけそれを見張るように立っている男が居た。なんか強そう。

「なにかこう…オーラってもんが出てますよね」

「知らないと？」

武藤が信じられないような口ぶりで言うが、一般市民から見ればそんなもんなんですよ。

「すごいのか？」

「中学高校今まで県内の大会全てで優勝し、全国大会では必ず二位か一位を取るといふ御仁でござる。今年でもう高校3年目で、名前は如月剣（きづひのけん）と言う。しかしだがな…面白いことにあの人と必ず優勝争いをするもう一人の人は女性なのだ」

「剣道って男女混合だったっけ」

「いや、普通は男女で別れている。しかし、その女性は実力が高すぎて女子では敵無しだったそうだ。興味本位で特別に男子の大会に出してもらったらしいがそしたら優勝してしまったのだ。それから普通に参加するようになってしまったのだよ」

「へえ、すごいなそりゃあ」

「拙者はその女性を大会で遠くから一度だけ見たことがある」

「美人なのか？」

「美人であり、なおかつ凜としている。大和撫子をそのまま再現したような御方であった」

「なるほど…かなりの美人と見た」

少し時間が経ったら武藤が前を向いて目を輝かせる。

「如月殿が地稽古に混ざったでござるよ」

「どれどれ…」

俺は探してみる。分かるわけ無いじゃん面被ってんのに。と思いつつ視線を軽く泳がせだけで何故かその人が分かってしまった。本当に全員面をかぶって顔が分からないのに何故かその人は分かってしまった。動きが一人だけ違うのだ。動きを見ると、ホントに実力があるってのは素人から見ても分かるというか…よく分からん。

とにかく相手の竹刀をよく見て、振り始めた瞬間に小手を打つ戦法が多い。しかもそれは前触れもなく動き出す行動、無拍子と言つらしい。さらに振るスピードも速く、竹刀が見えなかった。勝てるかあんなの。

「さすがでござるな。あんな人間が二人も居るなんて驚きでござる」  
「ああ、絶対正面から戦いたくないな」

「村山殿は闘争本能が刺激されたりとかしないのでござるか？」  
「あればいいな。そういうの」

闘争本能よりも恐怖が先行しますって。あのスピードで振ればきつと紙如きなら一気にスパッといくだろう。ついでに俺の頭も。

「こりやまたドライでござるな」

「しょうがないじゃない、怖いんだし。ところでいつ戻るんだ？」

「今日はもうそろそろ剣道場を撤収するのだが」

「じゃあそのあと学校散策をしてから帰るか」

「…うむ」

そこで地稽古が終わり、剣道部は休憩し始めた。面を脱ぐと汗だらけ…これぞ男だな。

「村山殿、拙者は如月殿と少し言葉を交わしたいのだが…よろしいか？」

我慢ならんといった感じで武藤が頼んでくる。おそらく如月という人は高校剣道でもとんでもないレベルの人で、その人と話したいという気持ちはよく分かる。

「よし、行ってこい」

「かたじけない」

武藤は音を立てずにすり足で走っていった。もしかしたらあいつも剣道すごいんじゃないか？

**第五話 武藤武史少年と文芸部（前書き）**

文芸部室前にてトラブル発生。

## 第五話 武藤武史少年と文芸部

「いや、感激でござるよ」

とろろんとした顔で帰ってきた武藤。そこまでうれしいのか、お前。「うれしそうだな」

「ただ話せただけじゃないのだよ。拙者めの力量如きを認めてくださっていたのでござる」

「そりゃあ、お前がすごいんじゃないのか？」

「いやいやまだ拙者。ものふとしてはまだまだ…全く最初から成長してござらん」

目を閉じ、むうと言った顔でうなずきつつ話す武藤。そう言う奴に限って強いというのが世の常である。

「じゃあとりあえず見回るか」

俺は何もプラン無しで引き連れることにした。

と言うことでまず文化部の確認。こいつは入る気はさらさら無いだろうが、俺としては運動部に身を置くほど自分の身をタフだとも思っていない。ということ、文化部入ろうかなみたいな気分で文化部が密集する特別教練にやってきた俺である。

「文ゲイ部？」

「文芸部でござるよ。村山殿」

「ああ、いや分かってたんだけどな」

文芸部という張り紙の張ったドア。部活動勧誘は剣道部を見ている間になりを潜めているので、現在は各部活動が自然に部活をやっている様子が見られる貴重な時間なのだ。

「どんなことやってると思う？」

俺は聞いてみる。

「やはり本を書いたりだとかそう言うことをやっているのでは？」

文の芸術、そんな意味で文芸であるから」

「いややっぱりそうだな。乗り込む？」

「仮にも先輩方だ。失礼は無きよう」

ふ、文芸部がそこまで堅いはずがないではないか。

「よしいくか」

俺はまずノックをする。

「一年生ですが部活動見学をしてもかまいませんか？」

そして確認を取る。面接の基本だ。

「ええ！？ ちょっと待つてください！」

なんだ？ 予想と違う返答だな。

「入っても良いですか？」

さらに聞いてみる。反応に期待しちゃうよね。

「ホントに待つてください！ 今は絶対開けないでください！」

そう言われると……もっと開けたくなっちゃうなあ……！！

「開けますよ？」

「ちょ！ 村山殿！ 無礼はないようにと言ったではござらぬか！」

「……ちえ」

ドアの向こう。文学少女である西曉寺静（西いぎょうじせいずか）は自らを小説の主人公に見立て、西曉寺家の余りある財産を使って衣装を作り、やっと部活動見学が終わったと言う所で安心し、そして衣装を着込んで一人劇を始めた途端にドアをノックされたのであった。

そしてドアの手前。

さて、開けるかな。

「村山殿。まだOKは出ておらぬよ」

ドアに手をかけた所で後ろからグサッ。

「いいじゃん」

「仮にも先輩であるのだぞ？」

武藤の声をスタイリッシュに無視してガチャッ。……ああん？

「ああん？」

つい声が出てしまった。声は心にとどめることはできないのだよ。

村山君。決してメンチを切ったときなどに出す声ではなく、いきなりの出来事に状況がよく分からなくなっているときの声だ。ああ

ん？

「……………」

目の前の女性も状況が分からないようで、パンツとブラジャーの姿で固まっている。さて、何をやっていたのでしょいか。

「村山殿…いい加減に…ん？」

ドアの影になつていて見えなかつたようで、現時点で武藤は気づいたようで、口をあんぐり開けたまま固まっている。ここで俺の意識が最初に復活する。

「いやあすいませんね。顔洗つて出直してきます」

そういつて笑顔のままドアを閉め、スタコラサツサ。美人だったが、その下着を見ることはできたが、いかんせん罪悪感にさいなまれてうれしくない。

「あああああ！」

その後、その人らしき人間の叫びが聞こえてきた。すいませんでした。

「あえ…？ 村山殿。拙者はどこへ行つていたのでござるか？」

俺がさつさと手を引いて一緒に退却してきた武藤はここで気がついた。しかし女性の着替えのシーンをつい見てしまつて固まるなんてシチュエーションは存在したのか。妹の場合は反応速度の問題で、こつちが視認する前にぶつ飛ばされる。

「heaven(天国)」

「そつでござつたか…つてそれは拙者が死んでいたとつてことであるか！？」

「まあ良いんじゃないか？」

冗談が通じないなこの人！

「それは良くないことであるぞ！ 浄土に行くというのはものもの一生を終えると言つこととござる！ 重大でござる！」

「あゝ！ もう嘘だよ嘘！ ただ意識がどっか行つてただだよ」

「それならいいのだが…」

ウェーブが激しいこの男は。

「で、これからどうする？ 俺はもう探索飽きたぞ？」

次の予定について聞いてみた。

「拙者は剣道を見られただけで満足でござる」

「じゃあこのくらいで良いか」

「解散でよろしいか？」

「そうしよじ」

と言うことで、俺達はそこから解散し、帰路に着くのであった。



第六話 兄と俺と妹（前書き）

自分で自らの歴史を振り返る村山。

## 第六話 兄と俺と妹

木曜日に行われていた入学式。残念ながら参加できなかったのだから先に目を付けられる。

金曜日、オリエンテーションを兼ねたホームルームと教科書の配布。それと部活動見学で下着を見た。ついでに武藤という仲間ができた。

休日の昼下がりに、入学式を終えた俺にちよっかいを出すためか、寂しくなったのか兄が帰ってきていた。ダイニングにて俺はミカンを食いながらテレビを見てみると、兄が話しかけてきた。

「はあ……」

自分の過去を振り返って（いままでの過去は無しとして高校からの話ね）ため息をついちゃう俺様。

「弟よ、何をため息をつく？」

それを見て問いを投げかけてくる兄。ちなみに兄はいつもこんな口ぶりだ。

「それはこれからの高校生活に対し、悪い予感しか感じ得られないため」

「そして、それを直すために篤志は何をする？」

「努力」

「勇気」

「勝利！！！！」

「うっせーよ！」

リビングにてのんびりテレビを見ていた妹が俺達に怒鳴ってくる。母はお前をそんな風に育てた覚えはないそうだぞ。

「まあいいではないか妹よ。兄のめでたい入学式なんだぞ？ 中学校から兄が消えてさぞかしうれしんだろう」

「こらあんだ。それは俺に対する文句かね？」

「…バカアニキが居なくなっって清々したわ！」

「そんなこと言うと勉強教えないぞ」

分からないことを一回鼻で笑ったら鼻を殴られたことがあったしな。これから独り立ちをする良い機会だ。

「それだけは止めて！」

妹はこの一言にだけは弱い。

「ッフ」

その反応に鼻で笑ったらいきなり妹が立ち上がり、一気に間合いを詰めてかかってきた。運動能力は一流なんだけどな。少しブレインがウィークなところがプロブレム。

「このクソ兄貴！！！」

バカアニキを昇進しました。そして、鉄拳が飛んでくる。オフウツ……。

「ハツハツハツハ。お前達はいつも仲が良いな」

兄がケラケラ笑っている。こっちは鼻が痛くて涙流してるんだけどな！

「なんでこいつと私が仲が良いのよ！」

妹が俺を指さしながら兄に怒鳴る。人を指さしちゃいけないって親に教わらなかつたのか？ おい俺の親！

「いやだつてね、世間では結構妹と兄との仲が希薄になってくる世帯が多い。しかしお前達は今でもそんなにコミュニケーションを交わしている。それは実に素晴らしいことだ」

「なんで素晴らしいのよ！ 大体こいつがいつもちよっかい出してくるからいけないのよ！ いけないのはこいつ！」

「そのころ妹は心で……（いつも寂しいのよ！ お兄ちゃんも最近はおまっしてくれなくなってきたし……）ゴフウツ！？」

いってえ！ 心の声らしき理想をやってみたがやっぱり殴られるよな。

「やっぱり仲が良いじゃん」

さらに腹を抱えながら笑う兄。

「……もういいもん！！！」

あらら、ドアを開けて出て行っちゃったよ。

「…アフターケアは？」

兄が問いを投げかけてくる。

「無し」

俺はきつぱりと答えてやった。

## a f t e r 入部

### 入部の時

俺は昼休み、前の武藤と入る部活について話していた。しかし、武藤はすでに入る部活は決まってるらしい。見当が付く。

「お前は剣道部だよな」

「いかにも」

いかにもといった感じでいかにもと答える武藤。まあもともとこの男に同じ部活を期待しているわけではない。俺にだってその程度の自立心はある。

「さまざまな部活を見て回りました」

俺は切り出す。

「そして？」

「そして私は思ったんですよ」

「どこの部活にするか？」

「文芸部でいいと思いました」

俺がそう言った瞬間。武藤が俺の後ろの方に目を向ける。なにかあったのか？

「何かあったの？」

「いや、別に何も無い…まあ文化部の中では実績もある故、それは良い判断だと思われる」

まあいいか。

「他にも生物部や、化学部を見て回ったがどうにも趣味に合わん。生徒の風が」

なかなかクラスの中でも卑屈な奴が集まったりするが、俺はそういった奴は嫌いだ。自己主張をしないやつはまず受け付けられない。

「結構好き嫌いが激しい？」

「ああその通りだ」

「…まあ村山殿の好き嫌いはさておき、文芸部に決めた決定的な理由はある美人の人かね？」

「それもあるが、違う。」

「あとで話してみただけで結構気さくな人だった。下着姿を見たことに関しては一応謝つといたよ。お前に代わって」

「…ちよつと待つのだ！？ お主拙者がドアを進んで開けたと進言したのか！？」

「ちよつと悪かったかな…いや、過ぎたことを責めることは良くないことで、これに関しては保留だな一生。うん。」

「まあ、いいんじゃないかな？」

「良くない！！」

「気にするな。ところでだが」

「なんだ！」

「ははは、怒つちやつてえ。」

「俺が文芸部に入ることにしたのはもう一つ理由があつてだな。あの美人の人はなかなか良い家に住んでいるようで、近い人間に対しては先生の口が出しづらいらしい。したがってあそこに入れば俺のスクールライフはベターノーマルになるわけだ」

「先生に悪い意味の特別扱いを受けるのはごめんだからな。」

「なるほど」

「そう言うことだ」

「俺が理由を伝えるのと同時にこいつの怒りはすぐに鎮んでしまったらしい。思ったより簡単に鎮んでくれたが、少し拍子抜けだった。」

「で、今日入部届を出すということか？」

「昨日出したよ。なんかあの入部員が定数まで今まで行ってなくてしかも俺含めても足りないからもう一人欲しいとか何とか言ってきたよ。お前は？」

「まだ入部届出してない故、兼部ならできるが…」

「顎に手を当てながら考える武藤。駄目だろ、お前は剣道頑張らなきや。」

「いやいや、お前は剣道に打ち込め。大丈夫だ、何とかするから」  
ホントにそう思う。

「…村山殿はやはり拙者の見込んだ男よ」  
腕を組みつつにやにやする武藤。気持ち悪いぞ。

「できるだけ定数には届かせるよう頑張るからな。じゃあこれから  
五時限目始まるしこのあたりで話は終わり」

「御意」

さて、放課後どうするか考えなければ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5357y/>

---

今日の村山

2011年11月26日01時48分発行